

# 「国際協力機関インターンへのプロセスと活動」 2022年度学生座談会

— 「国際平和と人権・人道法研究会」2022年度の活動報告①—

藤井 広重

座談会登壇者：福原玲於奈（博士前期課程2年）、新井廉（4年）、菊地翔（4年）  
座談会司会者：鈴木ひとみ（4年） 座談会聞き手：鈴木望夢（1年）、横井春香（1年）

## 概要

2022年7月11日に宇都宮大学国際学部多文化公共圏センター国際平和と人権・人道法研究会は、2022年度宇都宮大学多文化公共圏フォーラム第3回「国際協力機関インターンへのプロセスと活動：インターンを通して世界にはばたけ」と題した公開セミナーを開催した。昨年に引き続き<sup>1</sup>、国際協力機関でインターンを経験した藤井広重研究室に所属する3人の学生が自身の経験を共有し、セミナー後にインターン応募から準備、具体的な業務に至るまで学生サークル宇都宮国際平和と司法研究会（UIPJ）の2人を加え、以下の座談会を開催した。

**鈴木（ひ）**：これから、座談会を始めます。司会を務めさせていただきます、宇都宮大学国際学部4年の鈴木ひとみです。よろしくお祈いします。最初に本座談会でお話し頂く3名の皆様に自己紹介とインターン先のご紹介を簡単にさせて頂ければと思います。まず、福原さんからお願いできますでしょうか。

**福原**：宇都宮大学地域創生科学研究科に所属しており、また、アフリカ連合日本政府代表部で働いております福原玲於奈と申します。インターンは、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）法務部と赤十字国際委員会（ICRC）広報部で経験しました。

**菊地**：宇都宮大学国際学部4年の菊地翔です。現在、セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンの国内事業部、国内災害時における子ども・養育者のための緊急・復興支援チームでインターンをしております。

**新井**：宇都宮大学国際学部4年新井廉と申します。アフリカ平和再建委員会（ARC）でインターンをさせて頂いておりました。

**鈴木（ひ）**：UIPJから本日の聞き手として2人が参加してくれました。将来のことや現在興味のあることと共に自己紹介ください。

**鈴木（望）**：国際学部1年の鈴木望夢です。私は、アフリカの政治や平和構築について興味があります。

**横井**：国際学部1年の横井春香と申します。私は、貧困問題や子どもの教育について興味があります。

**鈴木（ひ）**：本日の座談会は、この5名でごつくばらんに、お話をしたいのですが、まずは鈴木さんからご質問はありますか。

**鈴木（望）**：具体的にお三方のインターン先の概要についてお聞かせ願えればと思います。

**福原**：UNHCR法務部は、日本に来た難民の

1 藤井広重（2022）「国際平和と人権・人道法研究会2021年度の活動報告③『国際協力機関インターンへのプロセスと活動』学生座談会」宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター年報第14号、258-265頁。

方々に対し、日本政府が難民認定を行う際の法的な助言やアドボカシー的な活動をしている部署でした。インターンでは、難民法に関する判例を調べたり、過去の裁判ではどのように難民の方々が認定されてきたのか調査、分析しました。ICRCでは、広報部でICRCの活動や国際人道法を日本で知ってもらうことを目的にニュースレターの作成であったり、Twitterのツイート案を作ったりしました。

**菊地**：私は主にI Support My Friendsというトレーニングキットの日本語版の作成に携わっています。I Support My Friendsは、心理的応急処置、簡単に言うところの応急処置の原則に基づいて、子どもが子どもに対して支援を提供することができるようにトレーニングするキットとなっています。既に、英語版のトレーニングキットはあるので日本語版を作成しております。具体的な業務としては、英語から日本語への翻訳や業務に関連するボランティアの方々への手続き、メールのやり取り、日本語版タイトルの決定、また計画立案などをさせて頂いております。その他にも、スタッフの方々から任せて頂いた業務があればそちらにも取り組みます。

**新井**：ARCは、1994年ルワンダジェノサイドをきっかけに発足した団体です。ルワンダジェノサイドによって、家族を失って孤児になってしまった子どもに対し、教育支援を中心に取り組まれています。団体自体は、かなり小規模ですが、インターン生が多く活躍しています。私は、ARCを知ってもらうことやルワンダ子ども支援基金というルワンダの子どもを支援するための募金をしてくれる人を増やすためのイベントの運営を行っていました。その中で、多くの有名な国際系のユーチューバーや国際ジャーナリストの方とコンタクトをとるという貴重な経験ができました。

**横井**：菊地さんに質問させて頂きたいのですが、I Support My Friendsで子どもが子どもを支援するという言葉があったのですが、具体的にその言葉がどういった意味なのか教えて頂きたいです。

**菊地**：このI Support My Friendsが基礎としているのが、心理的応急処置という考え方です。このころの問題として現れたときに精神保健の専門家がいる病院に連れて行くだけではなく、その前段階から家族や友だちのサポートが必要だという考え方に基いております。心理的応急処置は、元々子どもに対し、学校の先生であったり、家族であったり大人が支援を行うことが、セーブ・ザ・チルドレンだけでなくWHOでも進められてきました。「子どもが子どもに」というのは、子どもにとって、一番身近にいるのが子どもであるという考えから、セーブ・ザ・チルドレンが主導して広めている考え方です。



**鈴木 (ひ)**：団体の概要やインターンでの仕事内容が大きく異なるお三方ですね。

**鈴木 (望)**：お三方とも、多様な国際機関やNGOでインターンをしていたと思うのですが、どうしてそのインターン先を選んだのですか？

**新井**：自分がARCを選んだきっかけとしては、これまでも研究室の先輩方が国際協力系の

インターンに応募しており、インターンの経験談を聞いて、自分もやってみたいという気持ちになりました。昨年度の11月に今回のようなセミナーを藤井研究室で開催し、私は聞き手として参加しましたが、そのときからインターンに参加したいと考え、藤井先生から「ARCでインターンを募集している」と紹介いただき、調べてみたら、ARCの渉外の業務に魅力を感じたことが、応募に至った理由です。やはり、インターンでも、自分の武器を生かすのは良いと思います。自分は、英語力や知識的な部分でまだまだですが、コミュニケーション能力が武器となる渉外であれば、自分でも貢献できるのではと考えました。今回ARCでのインターンは数か月間でしたが多くのことを学び充実しておりました。

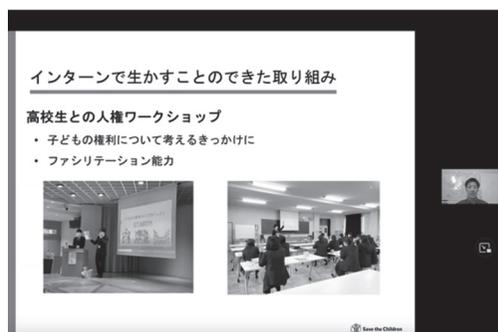
**菊地：**私は、将来は国際協力に携わりたいと考えていたので、いくつかのインターンに応募しました。そのなかでもセーブ・ザ・チルドレンを選んだ理由としては、私が大学2年生のときに学んだ子ども兵士について、紛争下で子どもたちが置かれる状況が大人たちとは全く違うもので、複雑な問題を抱えているということを知ったことが、一つのきっかけでした。また、UIPJに所属していたときの講演会でセーブ・ザ・チルドレンの方にご登壇いただいたことも大きかったです。海外事業部の方とアドボカシー部に所属されている方に、それぞれ子どもの問題に関するお話を聞いて子どもの権利や子どもが抱える問題について関心を持ちました。

**福原：**応募した理由なのですが、キーワードを挙げるとすると実務家の方々の出会いが学部時代沢山あったことです。例えばUNHCRやICRCで働かれている方が実際に宇都宮大学に来てご講演会をしてくださったことが、団体を知るきっかけで、そこからとても興味、関心が

湧きました。多くの方々との出会いが、インターンの選択や応募につながったのではないのでしょうか。

**横井：**先生方や外部の方との交流を通して、インターンを開始されたとのことですが、インターンの業務では、目上の方や初対面の方と接することが多くあると思います。そのような方々と交流するときに今から身につけておくことはありますか。

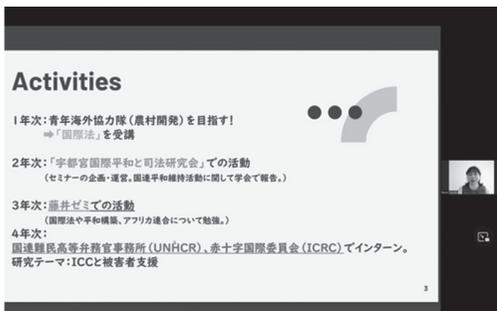
**菊地：**UIPJというサークルに所属していると外部の講師の方をお呼びして講演会をすることがあるのですが、そういった経験のなかで、実際に国連機関で働かれている方々と直接お話をしたり、連絡を取らせていただいたという機会は、インターン生として業務に携わらせていただく中でも生まれました。さらに、そういった講演会のなかで外部の方と連絡をとる際には主にメールを使用するのですが、そこで文面等に気を配る練習ができたことは、良い経験だったと思います。実際にインターンシップをさせていただくなかでも上司の方と連絡をとったりするときはメールを使うので、そのようなところで、この経験を生かすことが出来ました。



**新井：**自分は、まず普段からコミュニケーションにあたって気を付けていることになるのですが、やはり笑顔で積極的に話しかけるということはどこに行っても必要なことなのではないで

しょうか。インターン先でもそうですが、これから社会に出ても、大学生活でも必要なことだなと思っていて、自分からどんどん積極的に笑顔で話しかけて相手のことを知ろうと思えば、コミュニケーションをとるにあたって、色々な質問も浮かんできて、より良い関係が生まれてくるのではないかと考えています。

**福原：**私は、コミュニケーションの取り方を工夫しています。新井さんがおっしゃったように、笑顔がとても大切です。私は、コミュニケーションには3つの形があると思います。1つはメール、文面上のやり取り。2つ目は対面、フィジカルに会うこと。3つ目は最近できたオンラインという媒体です。そのなかで、私が気を付けていることは、メールだけのコミュニケーションにならないようにすることです。というのも、例えば、今回のセミナーも急に「これやるのでお願いします」というふうにメールを送るのではなく、最初に対面で会って「こういう企画をしているのですが、もし興味あったらどうですか」というふうに、実際に口頭でコミュニケーションをとったうえで、文面上でオフィシャルに連絡してみる、という、ひとつの媒体だけに偏らないようなコミュニケーションをとることが大切だということを最近感じております。



**鈴木 (望)：**国際的なキャリアだけでなく、一般的に自身のキャリアを形成するにあたって情報をどのように入手するのか、難しいと感じ

る学生が多いと思います。お三方はどのように学生時代から現在にかけて情報を収集しましたか？

**新井：**宇都宮大学は国立大学ですが、地方にありますよね。そうすると、他大学の学生からのプレッシャーとか、例えば大都市圏の大学だといっぱい大学があるので「バイト先の〇〇がやっているからやらなくちゃ」というふうに、そこから情報を入手する機会もあるのですが、宇大ではそういう機会があまりありません。そのため、情報が偏ってしまったり、まず情報入手することすら困難だったりということもあります。そのような状況をどのように打破するのかと言いますと、自分で積極的にどんどん情報収集して動くことが必要だと思います。しかし、その途中で、色々調べていくと自分の頭の中がこんがらがってしまうと思います。何かやりたいと思ったときも、自分がどういう将来を歩みたいのかと考えて頭がぐちゃぐちゃになってきます。そのとき、自分がよくやっていることは、ノートを開いてそこに自分が将来なりたいた姿、今はどういうことが自分にできるのかということをしっかき言語化して紙にまとめることです。自分なりに考えをうまくまとめて、キャリアを進めることが重要だと思います。やはりそれをやっても、自分自身とても悩むこともあったので、早い1年生のうちからキャリアも考えながら生活していくのが一番なのではないかなと思います。

**福原：**1年生の時は農村開発という田んぼや田植えをアフリカの人たちと一緒にわいわい楽しく国際協力できたらいいなということを考えていた人間だったので、自分の夢が固まってない状態でいろいろと情報収集していくと、いろんなトピックが自分の中にたくさんあって情報過多で消化不良に陥るということをたくさん経験

しました。そのため、私が皆さんにお伝えしたことは、情報収集をしていく中で自分の感性や興味というのもどんどん磨いていってほしいということです。キャリアにつながるから、自分のキャリアにつなげなければ、というふうに意識して情報収集する必要はまだないと思います。3年生になって、真剣にこれから大学院とかいろいろ考えなくてはいけなくなったときは、人脈やインターンを通して知り合った人たちから具体的な戦略や情報収集ツールについて聞けばいいのではないのでしょうか。今の質問者お二人の段階では、自分の感性を磨く、例えば子どもの分野といってもいろいろあると思うので、そういうところを磨くということが最も大事だと思います。

**菊地**：まずは自分の関心がどのような方向に向いているのかというのをきちんと整理することから始まるのかと思います。国際機関、国連、国際NGOは一見いっぱいあるように見えますが、きちんと分野を絞っていくと、この分野ではこの機関が機能しているということが詳しく見えてくるので、そういった面からも自分の興味分野を絞って、絞ることができたら団体を調べていってホームページ等を見てイベントに参加するなどできると思います。

**鈴木（望）**：インターンをされる際に日本語以外の言語を使う機会が多いと思うのですが、英語であったりフランス語であったりそういった言語はどのくらい使う場面がありましたか？また、仕事のためにどのような言語学習が必要だと感じましたか？

**福原**：実務の中でどんな言語が使われているか、というところからお話しますと、インターンを通して使用した、または必要だと感じた言語は英語とフランス語、そしてUNHCRではアラビ

ア語がかなり使われていたという印象があります。というのも、難民発生国が、仏語圏とかアラビア語圏だったので、フランス語やアラビア語が話せる人はとても重宝されます。なので、第二言語をこれから学ばれる方にはぜひ本気で学んでほしいと思っています。言語学習に関しては、基本的なところから始まって、専門的な内容を話すという機会もあると思うので、それこそ専門書などといった、自分の興味に沿った論文等の日本語訳に挑戦してみるのもよいのではないのでしょうか。

**鈴木（ひ）**：ちなみに皆さんの今の英語のスコア、またどのように勉強しているのかということについてもお話していただいてもよろしいのでしょうか。おそらく質問者のお二人気になられているかなと思います。

**福原**：今現在は、エチオピアにいて、英語に関していうと、IELTSのスコアは7ぐらいです。私の上司が8.5お持ちで、一緒に英語で仕事するとなると、英語が堪能すぎて何言っているかわからないことがしばしばありまして、そのため、スコアにこだわっているのなら8をとりたいというのが今の目標です。そして、他の言語については、アフリカ連合の公用言語がフランス語なのでフランス語をやらなくてはと思いながら、でもエチオピアの人はアムハラ語を話しているのでアムハラ語も勉強しないと、というふうに思いながら今生活しているという感じですか。付け加えるなら、インターンに応募したときはIELTSのスコアは6でした。ご参考までに。フランス語は全然話せなかったです。

**新井**：自分のインターン先は、英語ができるのはもちろん望まれていたのですが、業務は日本語で行われていました。ただ、資金を集めるときに、現地の方からインタビューをした動画を

アップするために翻訳等をしなければならず、そういう時はやはり英語の翻訳能力が求められました。英語力はあるに越したことはないです。国際機関のインターンというと、英語が出来なければならないというところもあると思いますが、すべてがそういうわけではなくて、例えば、去年藤井ゼミの先輩で、JICAでインターンしていた方は、一切インターンで英語を使わなかったと言っていました。だから、国際協力系のインターンだからといって必ずしも英語が必要とは限らないと思います。ただ、絶対その道に行きたいと思うなら必要な能力ですし、その道じゃなくても今英語ができる人材は必要とされているので、勉強しておいて損はないですね。加えて自分がインターンへ行ったときのスコアなのですが、今のところ教育の方へ進もうと考えているので英検をやっていました。自分はそのとき英検準一級をもっていました。周りの方を見ても、もちろんそのインターンによりますが、すごくできる方もいらっしゃれば、そうでない方もいらっしゃったので、そこは自分でそのときの英語力を見てインターン先を選ぶというのもありだと思えます。反対に高いレベルを目指してバリバリ英語を使うところを選択するのも良いのではないかと思います。

**菊地：**やはり国際協力に進みたいとか、国際機関に関わりたいと考えている以上、英語力は必要です。ただ私も所属しているのが国内事業部ということもあって、英語を話す機会というのは全くありません。どちらかというと、英語を日本語に翻訳するのがメインになります。私が業務を通して思ったことは、英語を読む能力と翻訳する能力は全然違うということです。英語を読んで頭の中で理解していたとしても、実際に文字として紙やパソコンで書くとすると、言葉が出てこないこともあります。日本語として綺麗な文章になるように、ただ読むのではなく

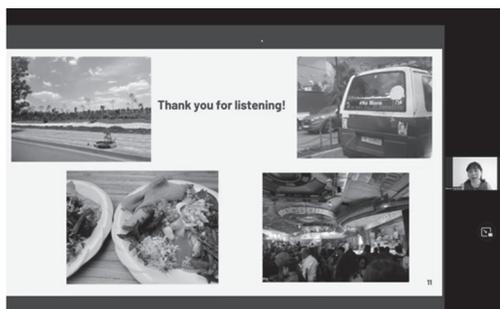
翻訳する、ということを意識しています。こういう機会はあまり無いと思いますが、日頃から意識しておくのと日本で活動しているNGOでは、広報などのポストでインターンを募集していることが多いので、翻訳のスキルがあるといいですね。英語のスキルに関しては、IELTSで6.0をもっています。今後は海外の大学院に進学したいと思っているので、スコアとしては7.0を目標に勉強しています。

**横井：**さっきの話に戻ってしまうようですが、福原さんから初めは自分の興味のあることがたくさんあって、それに関連した情報を集めていったら情報過多になってしまったが、そのあとに自分の興味のある分野に絞ることでその道に進んでいくことが出来たとおっしゃっていたと思います。自分が興味ある専門分野や自分の目標に進むためにどのように分野を設定したり自分の能力を高めていったりしたのか教えて頂きたいです。

**菊地：**私は今、子どもの権利について関心があるのですが、関心を持ち始めたきっかけとしては、高校のときにカンボジアに行って、物乞いする小さい子どもを見て衝撃を受けたというのがあります。その後、大学に入ってから子ども兵士という問題を知ったり、実際にNGOで働かれている方から、子どもの保護活動の話を伺ったりして自然と関心が向かっていったという感じです。やはり大学や大学院で研究し、キャリアとして国際協力の道を選ぶとしたら、同じ分野の専門家の方々は既にかかなり長い間取り組まれていらっしゃり、自分もどれだけその分野に興味があり、長く取り組むことができるかが大事だと思います。

**福原：**私も自分の専門分野は何ですかと聞かれたときに、国際法ですと言えそうな一方で法学

部を出ているわけではないので、自信をもってこれが専門ですと言うのには結構時間がかかると思っています。また、この分野に進みたいと決めたきっかけは小学校でお世話になった英語の先生がナイジェリアの出身で、アフリカに興味を持ちました。次に家が農家だったので農業だったのですが、一番のターニングポイントは藤井先生の国際法の講義を受けたときに、しっかりと知識としてアフリカの問題を考えることができるな、ということを凄く感じました。これが国際法の分野に進もうと考えるようになったことがきっかけです。



**新井**：私は進学されるお二人とは来年から進むキャリアが異なり、日本の学校教育に携わります。キャリアや自分探りでアドバイスするのであれば、自分がポリシーとして決めている好きな英語の言葉があって、**never stop exploring**という言葉があります。これはノースフェイスのキャッチコピーの言葉なのですが、「探求することをやめない」という意味があります。自分は高校を出た後、社会人を二年経験しましたが、職を辞め大学への進学を決めました。そのときから英語を勉強し始めてその言葉に出会って、探求することをやめないで色んなことに挑戦してみようという気持ちをもって励んできました。結果、それが正解か不正解かはわかりませんが、このゼミでの経験も含めて、たくさんの貴重な経験をすることができたので、探求することをやめないという気持ちは、今後皆さんがキャリアを見つけていく上で、一つの参考に

なればよいと思います。

**鈴木（ひ）**：素敵な言葉ですね。ありがとうございます。他に何か質問はありますか。

**鈴木（望）**：お三方の話聞いて、自分自身も国際的なことに興味があると言いつつも、まだ具体的に定まっておらず、いろいろなことに目移りしてしまうのですが、話を聞いて思ったのは日常の中のちょっとした経験でも、それが繋がってキャリアになるということでした。そういった日常のきっかけを見逃さないようにきちんと考えていくことが大事だと改めて感じました。

**横井**：福原さんにお聞きしたいです。先ほどのお話の中で、コミュニケーションで大切なのは文面と対面とオンラインだと仰っていましたが、コロナ禍に入りオンラインでのコミュニケーションが多くなったかと思います。困ったことや対面の時には感じなかった難しさ、また、オンラインになったことでよかったことがあれば教えていただきたいです。

**福原**：文章でニュアンスを伝えるのが得意な人もいれば、不得意な人もいます。私がUNHCRでインターンをしていた時期にコロナが流行りだして、上司とのメールのやり取りの中で自分の思いを伝えるのに苦労しました。他方で、コロナが流行ったが故にオンラインが普及して良かったなと思うことが、いろんな国の人やいろんな場所にいる人たちと気軽にミーティングができるようになったことです。実務の中でも、例えば今エチオピアにいますが、皆さんとこうしてお話できていますし、別の地域にいる研究者の方とミーティングすることになったらすぐにオンラインで行なうことができるようになったのはいいことだと思います。

**鈴木（望）**：新井さんにお聞きしたいことがあるのですが、新井さんのインターン先では草の根的な活動が中心だったと思います。国際協力と聞くとそういったイメージを浮かべる人も多いと感じているのですが、そのようなNGOで働くにあたって大きな組織とは違ってどういった能力が自分に必要なのか教えていただけると嬉しいです。

**新井**：インターンでの業務がかなりの小規模だったので、一番苦労したというか現実がよく分かったのは、資金集めの大変さです。本当にお金を集めるのは大変だと感じました。おそらく、菊地さんがインターンをしているセーブ・ザ・チルドレンや福原さんがいたICRCやUNHCRは世界的にも大きな国連機関、国際機関なので資金面に関してそこまで悩むことはないと思います。小さな団体だからこそ、自分はインパクトのある企画を出すというのが非常に重要だと感じました。小さなNGO団体はたくさんあると思うのですが、その中で有名になって自分たちのやりたいことをアウトプットして、同じ意思を持つ支援者の方に来てもらえるような企画立案や、情報を伝えるプレゼンテーション能力が求められるのではないかなと思いました。実際に私もそういうイベントをやったのですが、なかなか難しかったです。確かにイベントをやる前よりは出資者の方に集まっていただけなのですが、目標の数字には到達できなかったのが、企画運営能力やプレゼンテーション能力はこういった草の根的なNGOで活動していくにはやはり必要なのだと感じました。ファンドレイジングをインターンで学ぶことも一つの勉強かなと思います。

**横井**：菊地さんと福原さんにお伺いしたいのですが、インターン先で英語の文章を日本語に訳したり、日本語の文章を英語に訳したりする機

会が多々あったと思います。自分も苦手としていたのですが、なるべく似た表現で訳すために役に立ったこと、その難しさを乗り越えるためにどうされましたか？

**菊地**：私がやってよかったと思うのは、自分の日本語訳と同じ分野の文章を読んでおくということです。インターネットで検索すると似たような文はたくさん出てきますし、専門用語の訳し方はきちんと定まっているので、表現の仕方を学ぶことはできるのではないかと思います。また、インターンをしているセーブ・ザ・チルドレンで英語から日本語に翻訳する業務を行なう際はボランティアの方に依頼した部分もありました。セーブ・ザ・チルドレンに登録されているボランティアの方の中にはプロとして翻訳を行なっている方もいます。そういった方に翻訳をお願いして返ってきたものと、意識のような形で訳されていることもありました。日本語で使われていない単語があったら情報を補うなど、時には大胆に訳すこと必要なのかなとこのインターンで学びました。

**福原**：私も業務の中で翻訳を行なうことがあります。毎日翻訳をして外務省の本省の方々にはニュースを報告していますが、読みやすくなるのが一番大事だということを感じています。例えば、この間とても勉強になったと思ったのは、『私たち』という意味の“we”という単語がありますよね。私はそのまま『私たち』と訳していたのですが、上司の方にここは『〇〇外務省は…』とか、国を代表している場合は『〇〇国は…』と書かないと忙しい人たちは読んでいて分からないと指摘を受けました。なので、普段からニュース等で基本的な知識を身につけて、訳すときは客観的に見て読みやすいかどうか、2~3回確認することが大切なのではないかと思います。

**鈴木 (ひ)** : 一般的な日本の企業でのインターンとは全く違う業務を長期に渡って担当されたと思うのですが、組織の一員として働く中で、一番心に残っていることはありますか。

**菊地** : 業務初日に担当する業務について簡単なオリエンテーションを受けたのですが、この時「I Support My Friends」の今後のスケジュールリングをするようにと言われたことが一番心に残っています。「セーブ・ザ・チルドレンのインターン生として行う業務には責任が生じる、だからこそ、自分たちの活動は、これからの日本や世界の子どもたちのメンタルヘルスへの関心を高めることに繋がっていく」とメンターの方に言っていた言葉は、自分のインターンがメンタルヘルスという問題に日本で貢献できるということを今でも意識させてくれています。

**福原** : 難民申請者の方がオフィスにいらっしゃるのですが、皆さん着の身着のまま、私が、おそらくお風呂も一週間以上入っていないと思われる方たちと初めて会ったときに、きついにおいなどから、ここまで来るのに彼らがどれほど大変だったか、ということを感じました。インターンとして接する以上、UNHCRの事務所はその場で支援をすることはないので、「協力団体に行ってください」、としか言えず、その時に、自分の実力不足や不甲斐なさを強く実感しました。これからもそのもどかしかった記憶を大切にとどめておきたいと思いました。

**新井** : UIPJに所属することは、キャリアを考えても意味があることだと思います。自分がインターンの中である企画の運営担当を任せられ、今回のセミナーや座談会についてもそうなのですが、段取りというものを組まなくては行けないという時、だれにいつまでに連絡をして、どこ

の部屋を予約してなど様々な準備が必要不可欠です。自分がそのインターンのイベントを行ったときに、同じインターンの大学生に「新井くん、段取りすごくいいね」と言われました。しかしそれは、自分ひとりの力ではなくて、この藤井ゼミで一年間、藤井先生をはじめ先輩方に教えていただいたことで身についたスキルでした。質問者のお二人もUIPJに所属していると思うのですが、シンポジウムや座談会のマネジメントは今後必ず自分の力になる、貴重な経験だと思ってください。これからも一緒に頑張っていきましょう。

**鈴木 (ひ)** : ありがとうございます。外からでは、決してわからない熱い思いや視点について知ることが出来ました。では最後に、後輩へのメッセージがあればお願いします。

**新井** : 大学生生活4年間はあっという間だと思うのですが、自由な時間なので楽しむこともできますし、自分で充実したものにすることもできます。何か自分の中で成し遂げたと感じる時間にしてほしいと思います。

**菊地** : 私は、国際協力や子どもの権利について興味があって勉強しているのですが、それぞれ興味関心は違うなかで、何事も真摯に向き合っていればどんなことでも学びになると思うので、自分のやりたいことを精一杯やるのが大切だと思います。

**福原** : 私も1年生の時は、先生に敬語も使えないような人間でした。でも、なりたいたと思ったら、頑張ればなれると思うので、目標を見つけて、今後いろいろなことにチャレンジしてください。

**鈴木 (ひ)** : ありがとうございます。本日の座談会は以上です。皆様ありがとうございました。

# 2022年度 宇都宮大学 多文化公共圏フォーラム 第3回

**開催日時** 7月11日 (月)

**オンライン開催** 18:00~19:00

**参加費**: 無料、公開報告会

**対象**: 高校生、大学生 (事前にご登録ください)

**司会**: 伊藤綾音・佐藤野乃果

(宇都宮大学国際学部1年)

## 学生報告会の概要

本報告会では、国際機関やNGOでのインターンを経験された3人の宇大生から、インターン応募までの経緯や実際の活動、現在とこれからのキャリア形成についてご報告いただきます。

国際協力機関でのインターンは、企業でのインターンとは異なる点も多く、国際協力に少しでも興味や関心がある高校生や大学生の皆さん、ぜひご参加ください。



**福原 玲於茄** (宇都宮大学大学院地域創生科学研究科、外務省専門調査員アフリカ連合日本政府代表部)

**インターン先**: 国連難民高等弁務官事務所 駐日事務所、赤十字国際委員会 駐日代表部

はじめまして。現在、エチオピアのアフリカ連合日本政府代表部に、専門調査員として勤務しています。福原です。アフリカ連合って何？日本はどんなことをしているの？アフリカの生活ってどんな感じ？等々、初めてアフリカを経験している私から見えるアフリカ生活・社会・文化等について、これまでの学部や大学院での取り組みとともにお伝えしたいと思います。エチオピアでの趣味は、ズンバ教室に通うこととカフェに行くことです。

3名のインターンへの応募と業務に関するお話が聞ける貴重な機会!!

## 報告者紹介

# インターンを通して世界にはばたけ

~The experience of international cooperation will contribute to your carriers~

海外と関わる仕事に携わってみたい…けど、具体的に何から始めたらいいのかわからないそんな君へ!

**菊地 翔** (宇都宮大学国際学部国際学科4年)

**インターン先**: 公益社団法人  
セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン



**Save the Children**

国際協力を行う団体には国内・国外問わずさまざまな団体がありますが、セーブ・ザ・チルドレンは、名前の通り子どもに焦点を当てた支援を行う団体です。皆さんの中には、大学生活を通じて、また将来のキャリアとして国際協力に携わりたいけど、何をすればいいのかわからないという方もいると思います。そんな方々に、私のインターンとしての経験や応募に至るまでの取り組みを1つの例としてご紹介できればと思っています。



**新井 廉** (宇都宮大学国際学部国際学科4年)

**インターン先**:  
アフリカ平和再建委員会 (ARC)

私がインターンをしていたARCはルワンダを中心に活動する国際NGO団体でした。業務としては、イベントの運営や広報などをインターン生でありながらも第一線で活動させて頂くことができました。それらの経験から、NGO団体を運営するにあたって重要な多くのことを学ぶことができました。今回のシンポジウムではインターン先での経験に加えて、インターン採用へのプロセスも含めてお話しさせて頂ければと思います。国際協力に興味・関心のある方はぜひご参加ください。

## ご登録フォーム

<https://forms.gle/PFGQpPn6A89rjLsKA>

Zoomの情報を当日までにメールいたします。

代表教員:

藤井広重 (fujihit@jcc.utsunomiya-u.ac.jp)  
<https://www.fujih.com/>

\*本イベントは、2022年度宇都宮大学イベント等支援経費からご支援を賜りました。

共催: 宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター国際平和と人権・人権法研究会  
学生サークルUIPJ、国際学部藤井研究室